

## 『寿式三番叟』

「寿式三番叟」は、猿楽の「式三番」（現在の能の「翁」）を義太夫節にうつしたもの。翁太夫、年若の千歳につづいて、三番叟が舞をみせる。「式三番」とは「父尉」「翁」「三番猿楽」という三演目。「三番猿楽」が「三番目に出る翁」という意味で、のちに三番叟と呼ばれるようになった。荘重厳粛な語り出しに続いて、翁の謡が「とうとうたたりたたりら」（能楽では「どうどう」と濁るのが古型とされる）と、囃子の音を模したとされる詞章にはじまり、「鳴るは滝の水」から千歳の舞、五穀豊穰と国土安穩を祈る翁の舞となる。続いて、三番叟による賑やかな振りに気分が変わり、連れ舞、揉の段、鈴の段をみせる。

現在の曲の原型については、宝暦十三年（一七六三）四月十八日の刊記をもつ正本「新舞台咲分牡丹」の第一「新舞台／式三番（角書）三十石艦始三番つゞき」（内題「新舞台式三番叟」）の「壺番目」が、現行本文と同一と指摘されている（『国立文楽劇場上演資料集16』に翻刻紹介）。三番叟は、各地の民俗芸能や、歌舞伎、邦楽、さまざまなジャンルに影響を及ぼす祈りと祝福の芸で、文楽でもおめでたい祝儀曲。

颯爽たる千歳に続いて、神々しく厳粛な翁。翁が陰気に聞こえては恥、と初代鶴澤道八は言い残している。「おおさへおおさへ」からの三番叟は、長い合の手のくり返しで激しい舞を見せる。疲れ果てた三番叟（又平の首）が休もうとするのを、もう片方の三番叟（検非違使の首）がたしなめて叱咤激励するおかしみが、文楽らしい味わいで、文楽の三番叟を歌舞伎化した市川猿之助家の「二人三番叟」や、播州歌舞伎の三番叟（千歳が女形となる）にも受け継がれている。

（児玉竜一）